

今週の言葉

「労働」の主人になる

2016年春の大卒採用の予測は、企業の好業績や人手不足を追い風に、今年春に比べ14.2%増え、長期的にも労働人口が減るために、景気が悪化してもリーマン・ショック後の就職氷河期のように採用数を極端に企業は絞らないだろう、と報道されています（『日本経済新聞』2015年3月29日・30日付朝刊）。就職の状況は良くなるという予測がでているわけです。とはいっても、実際に就職活動をしている、これから就職を始める皆さんには、採用が必ずしも約束されているわけでもないので、いろいろと大変だうと思います。



キャリアサポート副部長 北山幸子

私は、これまで企業の中で働くとはどういうことか。また、働き方とはどうあるべきか、ということを学生の皆さんと考えてきました。そこで、これまでの授業で取り上げた武田晴人・著『仕事と日本人』（ちくま新書、2008年）をここで紹介します。経済史研究を専門とする武田先生は、はしがきで、「人は、人生の中で最も活動的な年代に相当な部分を働くことに時間を費やしているが、働くことには、金銭で表される個人の所得とは別の社会的な意味があるのではないか」と問いかけ、「近代のはたらき方＝「労働」には、「組織のなかでの労働」としての性格をもつために、働くことが本来もっている性格ではなくなっている」と述べておられます。

では、働くことが本来もっている性格とは、いったいどのようなことでしょうか。武田先生は、「労」という文字の正確な表記は、冠が火と屋の合字の「労」で、炎が屋を焼くような災禍のときに、これを防ぐために力を甚だしく使うことを意味し、ここに注意する必要があるとされます。私なりにこの本から学んだことは、働くことの本来の性格とは、自己の利益にとどまらず、社会に役立つ営み、行為ということです。それが、組織のなかで働くとなると、利益を求めてはいけないはずの仕事もお金になりさえすれば職業として承認され、職業である以上は社会に有用な仕事となってしまう。反対に、お金にならない職業は、社会に有用な仕事と看做されない可能性があるという問題です。武田先生は、多くの文献から働く意味を説き、個人が労働の主人になれと述べられます。この本についての私の紹介は、言葉足らずですが、これから労働市場に参入しようとする皆さんに、是非読んでほしい本です。



「日経新聞の読み方」セミナーが開催されました。

4月28日に、開催いたしました「日経新聞の読み方」セミナーはいかがだったでしょうか。何度も申しますが、この新聞は、企業のトップから人事部長、人事担当者などは必ず読んでいる新聞なのです。

ただ、この新聞は、学生にはなじみがなく、一日分で、44ページもあります。活字離れの進んだ学生には、どちらかというと読みたくない新聞で、皆さんのお気持ちはよくわかりますが、就職活動には必読の新聞なのです。

就職活動において企業の担当者と話をする際に、必ず話題のソースとして使われますし、また自分に適した企業を研究するための重要なツールになります。

特に、月曜日は学生向けに、就活関連記事の特集が組まれますので、就職活動の際は、必読ページです。一週間の試読（無料）もあります。希望者は、キャリアサポート室まで。

キャリアサポート室

